

スイス
from
Switzerland
中 東生
Shinobu Naka

音楽情報

チューリヒ・フィナーレ音楽祭

チューリヒ歌劇場は7月4日から、2019/2020年シーズンを締めくく「フィナーレ音楽祭」を急ぎよ企画・実現した。演奏者も聴衆も運営側も、ライヴ演奏への感謝に満ちあふれた8晩となった。4、5日はファビオ・ルイジ音楽総監督とフィルハーモニア・チューリヒがR・シュトラウス《メタモルフォーゼン》とシェーンベルク《浄められた夜》を、繊細な深い色合いで演奏し、とくに後者は涙を誘われたという声が多数聞かれた。

6日はサビーネ・ドゥヴィエル(S)とバンジヤマン・ベルネーム(T)のリーダーイベント。フランス人二人が母国の作品に収まらず、多彩な構成で約3時間の長丁場を繰り広げた。ドビュッシー《忘れられた小唄》を歌うドゥヴィエルは美しい声を織り糸のように編み込んでいく。母国語の歌曲に譜面台を使うのは感心しないが、不安気な曲も乗り越え、5曲目の《緑》は完璧！最後の《憂鬱》は可能な限りの弱音を駆使した。代わってベルネームはデュバルクの歌曲で、やはり弱音を聴かせるも、ピアノのキャリアー・アン・マテソンの情熱的なピアノの音が歌曲には強すぎたが、オペラでは本領発揮。ドリープ《ラクメ》の《鐘の歌》にはドゥヴィエルの声は柔らかすぎる部分もあるが、完璧なコロラトゥーラに負けじと、マスネ《マノン》のデ・グリュエを歌うベルネームも恋心を情熱的に表現した。後半は二人ともR・シュトラウスの歌曲でドイツ・リートにも強い声さばきを聴かせ、最後はドニゼッティ《ランメルモールのルチア》(フランス語版)の二重唱でプロگرامを終えた。いちばんの驚きはドゥヴィエルのアンコール曲、ワイル《ユーカリ》だった。コロラトゥーラ・ソプラノなのに低音まで充実している声を駆使して、シャンソンのように歌う彼女の将来が楽しみだ。

ハンプソンのマーラー、
ダムラウとメストレ

7日はトーマス・ハンプソン(Br)が、マーラーの160歳の誕生日のために、初期から晩年までの歌曲を組み込んだ前半だった。オーラを振りまいて登場するハンプソンは、息の流れが見えなかった2曲を経て、どんどん深くマーラーの世界を掘り下げ、「マーラー歌い」の本領を發揮した。ピアノのヴォルフラム・リーガーは音で絵を描いているようすばらしさだ。《子供の不思議な角笛》の《死んだ少年鼓手》の鬼気迫るハンプソンに糸も乱れず寄り添った。そして《リュックケルトの5つの詩》の《私はこの世に忘れられ》を完璧な芸術に創り上げた。《美しさゆえに愛してくださいるのなら》では音と戯れて、愛撫するように語りかけて前半を終えた。後半はフォスター、ファーウエル、アイヴズ、ドアティ、ボンス、ボウルズ、ベルガー、ステイルとアメリカの作曲家を散りばめ、最後はブルースの唸り声まで聴かせたハンプソンと、ジャズ・ピアニストかと思わせるようなリーガーの変幻自在さで、芸術的レヴェルでは当音楽祭の頂点であった。

8日はディアナ・ダムラウ(S)と、ハーブのクサヴィエ・ド・メストレが一転して軽やかな音楽を奏でた。1曲目のメンデルスゾーン《歌の翼》から息が

流れに乗って、ハーブの音色と共に心地良く流れていく。リスト《鶯》の輝かしくも繊細なハーブ独奏を挟み、ロシア語のラフマニノフとウラソフで前半を終えた。後半はフランス一色だ。アーンの歌曲の後、ドビュッシー《アラベスク第一番》(ハーブ編)でワイルトウオジティを聴かせ、プーランクの歌曲群を《愛の小径》でノスタルジックに締めくくった。アンコールにまたドイツ歌曲に戻って来ると、ダムラウはやはり母国語のほうが聴衆に直接訴えかける力が強い。

フィルハーモニア・チューリヒ
によるフィナーレ・ガラほか

9日はフィルハーモニア・チューリヒ内の古楽アンサンブル、ラ・シンティッラをリッカルド・ミナージがヴァイオリンを片手に弾き振りし、元アンサンブル歌手のジュリー・フックスと共にバロックを庶民的に楽しませてくれた。歌い出しや「ア」の母音が明るすぎて、スープレットを脱せない印象を与える以外は、悲劇も喜劇も身のこなしも演劇的要素もすべて完璧なフックスは、いままで出演したオペラでの体当たりの演技の底にある源泉の深さを見せ、ますますの飛躍が期待できる。

10日はハビエル・カマレーナ(T)とエンリーコ・マリア・カッチャーリ(D)のリーダーイベント、11、12日はもともとチューリヒ・フェスティバル内に予定されていたビョートル・ベチャワ(T)&カミッラ・ニールンド(S)のオ



スイス
NOW

新型コロナウイルス
関連情報

ようやく軽い症状でも検査が可能に

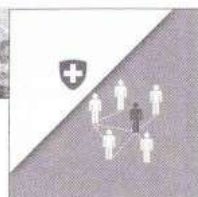
スイス～日本間の直行便を唯一運航しているスイス・インターナショナル・エアラインズは、6月から毎日1便だったダイヤを週2便に減らすものの、運航を再開した。6月15日にはEU・EFTA加盟国、英国に対する入国制限が解かれ、19日に新型コロナウイルスに伴う非常事態宣言を解除したが、直後の6月21日、チューリヒのナイトクラブ、「フラミンゴ」で初の「スーパー・スプレッター」感染が発生し、300人が自宅隔離となった。6月25日から感染症の検査費用を政府が全額負担し、ようやく軽い症状でも検査を受けるように呼びかける状況が整った。

7月6日からすべての公共交通機関で、12歳以上のマスク着用が義務づけられた。連邦政府は、一貫してマスク着用を義務づけしない方針を取って来たため、公共交通機関が独自でマスクを配るなどして乗客の啓蒙活動に励むと共に、検札員などの従業員にはマスク着用を義務づけていたが、世論調査によると、7割近くが義務づけに賛成していたことを受け、連邦政府は義務化に踏み切った。また、アメリカ、ロシア、スウェーデンなど29カ国のリスク地域からの帰国者は、10日間の自宅待機を要請する政策に転換したが、自己責任に任せているため、批判にさらされている。そこで連邦ならではの政策として、各州独自の方針を打ち出し、商店でマスク着用を義務づけている州もある。

6月25日から、感染者との濃厚接触者を追跡するアプリ「SwissCovid」の一般運用が始まり、7月1日には93万人(人口860万人中)がダウンロードしたという。スイスは香港の企業連合ディープ・ナレッジ・グループが6月5日に発表した「COVID-19地域安全性評価」で「世界でもっとも安全な国」という評価を得た。第2位のドイツからイスラエル、シンガポールと続き、日本は第5位となっている。それらシェンゲン域外15カ国からの渡航も20日から可能となり、観光客も徐々に戻ってくることだろう。



ようやく週2便の日本直行便を再開するスイス・インターナショナル・エアラインズ



「SwissCovid」のアイコン

ベレッタ・ガラで締めくくった。コロナ禍初の管楽器登壇で、普通はマーラーなどの大編成オーケストラを乗せるための大舞台に、間隔を空けて配置されたが、弦のユニゾンもピタッと合って美しい。記者会見で何度も、「いかにオペレッタに力を入れているか」を強調していたルイジがさすがの棒さばきを見せた。ニーランドの成熟した歌唱力とドイツ語の聞きかたも功を奏したが、声が聴衆に迫ってくる発声法ではない。ベチャワはオペレッタで聴くのはもったいない重量級の声を自在に操り、当歌劇場での新演出に出演したレハール《微笑みの国》のアリアで聴衆の喝采も最高潮に達した。しかし、よくある「ソプラノとテノールのオペレッタの夕べ」に終わらず、今宵の主役たる演奏を、風通しの良すぎる配置でも達成したフィルハーモニア・チューリヒ



「ソーシャル・ディスタンス」で演奏するルイジ指揮フィルハーモニア・チューリヒ
©Andrea Zahler

ヒと、オペレッタがレパートリーではない管弦楽団をここまで引ったルイジに感動した。シュトラウスのホルカ《雷鳴と電光》ではウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤークンサートをほうふつとさせた。「音さばきが少々重かったのはウィーン・フィルでないからしかたない。近い将来に、ウィーン・フィルのニューイヤークンサートにルイジを招いてほしい」などと思わされたほどだ。もちろん、第1コンサートマスターのバルトウオミ・ニジョウのソロは輝かしくて美しく、ソプラノとのデュオの部分など、ついヴァイオリンに耳が吸い寄せられてしまうほどだ。首席チェロ奏者のクラウディウス・ヘルマンと第2ヴァイオリンの首席奏者、アナヒト・クルティキヤンとの連携も強固な支えだった。来シーズンが楽しみだ。